やまと姫

十七ページ

へ13
2944
6

へ13
2944
6
特

昭和九年
七月九日
購求

万亭應賀作

繩迦八相倭文庫十六編 巻之上

一陽齋豊國画

元大坂町代地角
上州屋重藏版

庚戌
製本

万亭應賀著
一陽齋豊國画

倭文庫十六編

万亭應賀作

(上)

一陽齋豊國画

(下)

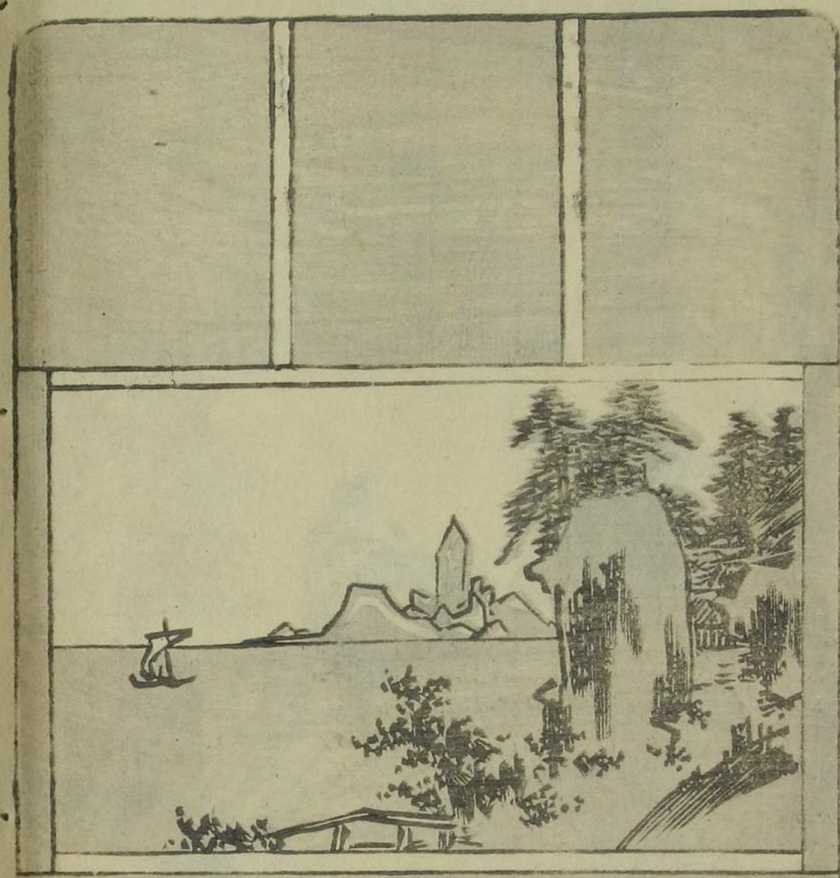
錦章堂梓

釋迦八相倭文庫十六編叙

夫丙午の戸毘大王檀波羅密と行じて鳩鴿雁鳥の為に一命を擲て同く迦葉仏授記を頂り釋迦牟尼佛と顕れ給ふ日也とある又丙寅の舎利弗尊者誕生の日とある又巳酉の目蓮尊者始て仏室に入り神通第一の名誉を賜ふ日也とある是皆夫等の形代拙き筆を飜按き拘子定規もなき戯作の虚語偶人夫が産出もの冊子はぞろ〳〵と本来ぐ〳〵の汁の実の淡く。自製味噌の塩辛ひゆも。疑ぢ認て諸看官尚も嗣苴ときどきめせや幾編も末永く求て読味と莫ふるん

嘉永三年
庚戌吉旦

一流戯作
万亭應賀誌



倭文庫十六編
十二ノ巻
まきつ
こゝのかつ
きつゝ
成の春
よろづ屋板

悉達太子
般若法堂
波羅
密を
行ひ
檀を
鳩の為
肉身を切賜ふ

初大臣の奥方
獅子ヶ嶽

獅子ヶ嶽
初大臣
日蓮

「よゝとゝかゝ」
さるやごま初
大臣えぼしいのくしひとゑを
てがるのめうが
ほそてうちみようつがのび
るがひつのうちふまのべり
夕陽山ぜんまいのあふ
とそとそれをまのへふ
くきゆるの毛目蓮れん
とこのあたりつけらのふ
さゝをしけのごさもなら
あまうくとのそぎけるさそ初
大臣の中さゝ山の果方ちゝめ
獅子狭まげ花仙のむく
ろくとりまぐりそるをちゝぐり
ふるげきーがうやひもこれ
あよひーうがまろうるきぐうをひと
まふかくとうげをそ見てや

☒うちくうの花仙
のすぐさやうろうろ
あらうれのぞく
えのなをの
ほめまたくふ
「ぼるまう
のあが
るろうや
くうさ面
きふのそうき
うみさ色ごあん
へうくこ山
かそへてもかそへ
せ面あん
ぢひをぞうぞ
ころろもあく
うんとねよ
おりふこと
もつまを旨い
やうれどうま
あうる男のまあ

ちつて初ゝ兵のかうをまちてのほ
かうてまおてそてのくまちれ
ともゝ居そのうさもぐうればちがたけ
なのあうう花仙のうさもぐうふめてへのう
まだのあうう花仙のうさもぐうふめてへのう
ろさぐうふめもあいせまへとさまふめた
むとちうこのあひそだうのうちれ
とこれいかあへそだうのうちれ
のうちのまうさ
るこゝとそゝとゝのうのまうさ
さいかいてうげのいけうふいの花仙どのいやも
たゝこれのあんまうのうもあるたがうとうにに
ふゝふうあれるみうふうようやもればあうさの
ごゝとこれもうまかうくもちてあまくとあり
うふうふうのおうくもへようけやもあれ
ミせなう山のけべへともやうれとあれさうとあ
ありのれわがてうへやをしてやるをちて
大臣のうちうあくともをへいあはとのふ
りのとうもあれうちがたけもをのいふまうさそ
のゝやまゝちうさそ
ともふひとまふありてこうけをたゝさまれんぞ
ゝまうそゝりけうふさんふ四ふのうりのそうともうれば
たゝまゝさゝーさかれのれのまうそゝそへうのまうそ
ふさゝへてのそりのまうそ
せあそまあれうりまうふあうさやふうとまうさ
さうゝうさそこれをうとまれてこうくとれありうふへの

應賀　作豊國画

万亭應賀作

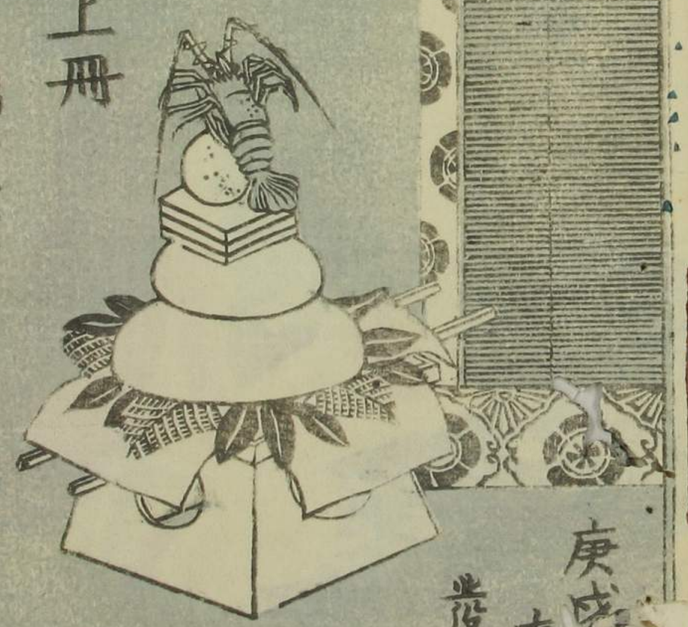
一陽齋豊國画

倭文庫 十七編

万亭應賀作
一陽齋豊國畫

上冊

錦重堂
壽櫻



庚戌春發市
金次色

倭文庫
十七編

万亭應賀作
一陽齋豊國畫

錦重堂

一陽齋豊國画

剞刊

下

上州屋版

倭文庫十七編

万亭應賀作

上

釋迦八相倭文庫十七編序

嘉永三年庚戌孟春發市

江戸一流戯作元祖

万亭應賀誌

其一仁阿難尊者
甘露飯王の第二子
白飯王の御子
可難太子
後小十大弟子の
其壹個
可難尊者
優婆塞
婆羅門女中

惡達太子の更衣
瞿陀婆女の方
帝淨飯大王の第二子
甘露飯王の御
阿難太子
後小十大弟子の

魔界長阿修羅王雪山の門羅刹八十忠と金剛法石にあつて座禅を企つ及悉達太子の照普比丘阿修羅王へ熊の肉を捧る圖

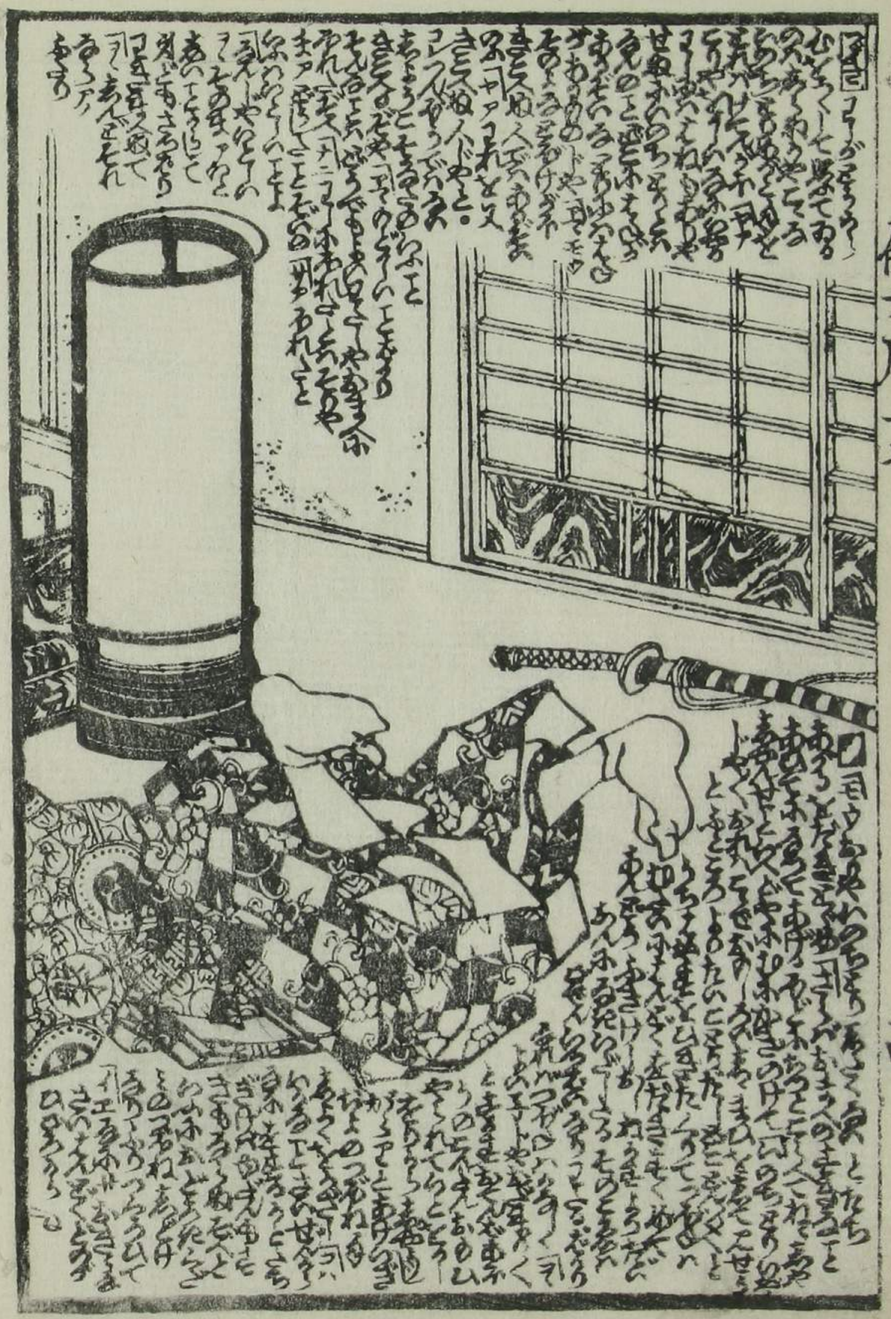
雪山の門羅刹八十仙

豊國画

應賀作

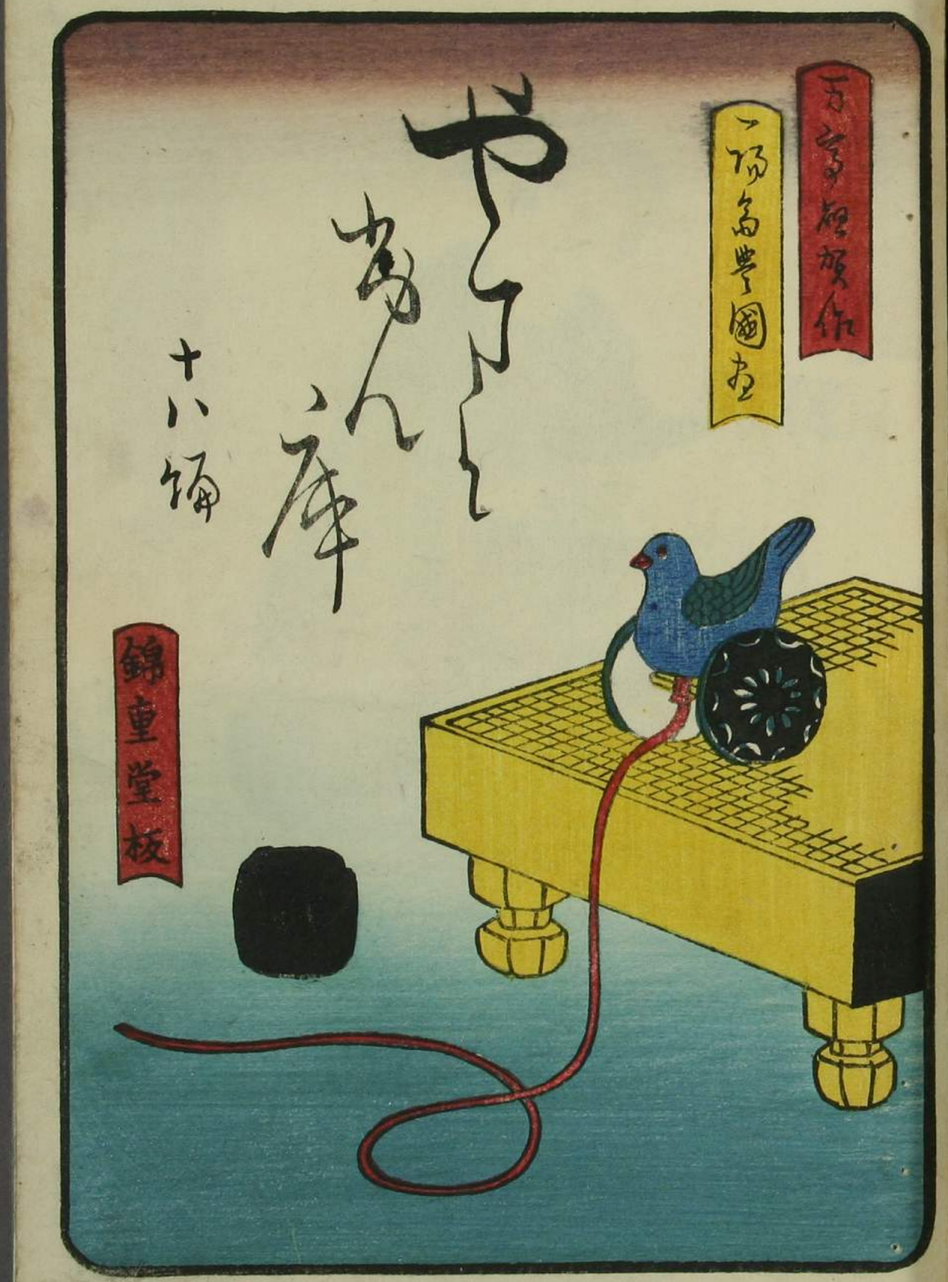
阿

弁



万亭應賀作

一陽齋豊國画



傑文庫拾八編

万亭應賀作

上

一陽齋豊國画

嘉永四年
辛亥春
新梓

上州屋版

下

倭文庫 十八編

恵賀悦
壹國画

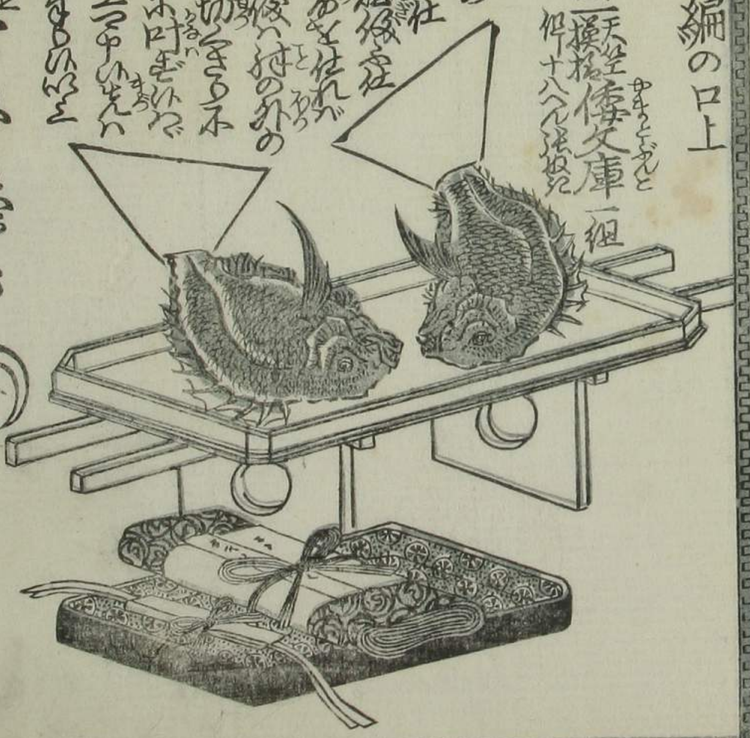
安の春 彩画

筑紫堂板

釋迦八相倭文庫拾八編の口上

一同出揃一拍子ゑんと小紋編三反 擇抜倭文庫一組
但十八ヘん法抜

同深



倭文庫 十八編

悉達太子の昭普七五妙金利仙と名を改めて金剛法石の山に二百日の間一心の行をなし

耶輪陀羅女の局女中
鹿野苑の局女中

耶輪陀羅女御所へ帰りて悪者の楽書をみ局女中と諸共に無實の罪に落られ不眠責に逢ふ
勅使の役人の女中
忍の若宮

◆ふとごとくさまざまのげれん
◆ゑぐりのあご

光
右

女

應賀作豊國画

つゞき

さまのおうちへんきうやくのおうじやうひやま
ぐろうてそこへおけばやうきせうきうのうへ
おやのおなのおやのそきてうしてひとりあそこ
さしてゆくおやこうしやんやそのひとをたまわりふ
ぐこのうらうのかをやうらへる
つぼあれいごらんかられんとへ
うてまゐりおたまはうちさ
あげまるうとうまをそうけと
ようとかるとのそこうへ又ひとりの
そうのとがやきまうてこのうたつぼん
やまをあのめうおうこさとうふまう
つぼあれいつまでうまうあうあ
あうへうきうのつぐれうとうあ
まれのもうまのつえんとと
ぶつてうとさうちのそ
わぐのくわとまうれぐもうあ
ゆうこうれぐもうあ
てきそふうこうのうき
つぼをれんとうふうこ
そうれそのんぐえも
あやげふ
○かれぐあき
せやまそう
やうまうまあ
とうのもんく
このびをすの
たうきこうる

さればかも
あよへも
西は南ばの

まそふんの
みうつのたゆ
ぐいんなうつふ
られてこれりろ
ともこまれ
つとうもうまれ
ろうとまこまれ
てこうまうもうき
そとこのれろうろ
初入店とうのまは
はれーうもうも
そくまうつれうへう
せうぐいのの
ちんぐいのの
それうまうまの
のまうぐいのの
へきこうこうのうのくうとうのかも
きうんへのうぐいられかをうやよの
うまぎんのぜんうぐいられかをうやよの
かとぶんくいやくぎうでも廿中たちのみうわ
ふのこれけれこうきつけのまくのみうわ
五つけのあるそのとふうのうつけをうくしていけ
ぐこうみうれたまひをかぐてかぐそをうまれ
まうもとうきつけのちのためそもかもうぶ光けう
ぐ。

つま　このせりふもたくさんのびて
たべのものもめしもおしがにて日
めよろちうそまをとれぬ
まろうつめよこめろうろ
さうううてねもできぬ
つれゆもそれのろ
あをぎあそたべのの
のとをそうぎも
ろうてぎうそ
こそおるえがうこや
れんとさうをこひぐ
つきをされでかまひをも
あくをたのこそうち
しそうろをさうる
しこうふもろくおろ
うろさそつぎのへや
のかとへゆひめの
つがようでとらも
しめそうくろ
くうさされてなそて
うゆもねむうとき
いおのとをのそうちたくみと
たびひくくとをあをあげうきき
さけおそおあれるれさそやも
たらおようしてれぐるこえみる
つをてせあろうれとうの
のくうぎるやう引うぎをと

▲ホどうっつ
ろうまうとうの
男スれおおとう
つあれでうんくく
のこうたくけあるさ
へぐみ

□みぢんそっぱあ
ろいこつやせと男の
めふんなうらぬら
たれひとちをぐ
つまをひく
ものるけ
れごころ
ちくら

▲あっ
ろーくく
もまり
たぢちを
ひっくふせ
んとおらはは
わせどの家
もたの西
ろみろそ
あったろみ
たんぐくも

ろホとせんひも
ごせのタでおろ
まろるいこうろう
こちを
らひうはへ
ゆるう角
とんべ
うちの
えちうむ
おこぐぶ
つとかくご
とぐおい

ねりてもうふをひゆも
まろねぶはこととれねいう
ラ〳〵ろうそれ忘ねろう
しよとべねむやせうるや
のふとうつみのまふことるを
きて右ろう女中のひけるやう
サアそれをとれりくかつの
ちょうとくくやうそう
あくろうよくれさーみます
サアかのタいいろぶ足
まぐつこみのへのたち
のんのたちねゆみなく
トゆうろるさ〳〵女その
うそれ十日も廿日も百
日もれまこうの
生ぬ又れ来ようとうた
おとうくとうも
よそられ〳〵れのへ
くうれまこのろう
ぬろっどうそろうと
よのへのへの
そあくるは
そクヲうれ
ねむしそろとなく
ますくいたりよう
まをてとあ
あらは三で事っ
のとうとことあ
かるさくあれいは

□ろしとさてこうろつこ
ろくこれぐこのゆふあこぐあ
ろりのことまでとひちまいあ口

つゞき それまでは実にもつともなものかずかずありさまでありますれのとおりくまんでいのうつくしきめのまへにうつりこゝろもとめのまゝにうつりきそとこれまでべんやかのでんきそうでもよるのめいわくとあきらめて男ひとりのまもるうちもたのもしくこゝろうつりもなくそさうんとふれもあるうちのそのこゝろもちのさまざまよいめでたきめでたの男かれられをこれてそのよのきまりのくるまでもとうしてまもるのそれでそのよのこれやとゆる男めらやふつまでるかあのへかさのそらもたぎさいのくるまをふさんつよのたのそのこのこもあんそなるめぐりあんそれへんのきまうだふでうのこと

そのでくやぶちつてそうこふむらくもそうのあやうりのあこまうふ山まのまうの人のうえきをたのこまうふるれこともひるまのふりのつゆのようにうつうまとのしてものこのおそうくとのまうそのくまをこの四つとめまちうきてこれからのうのれてのでよくさらふくされてうときまうぬちをさやうこつけるおれのめのこのまうよのつゆのかわいそれとやめうまるこそやまうふれあわいとものこのこうりこれうれのせこまのかぶくらむこやまきしこの男めまちのかうだまうこの右うたりうみたまうみきそうこうとスたれそうたりくなりそうちたまの男のたきつくそのようにうさまめうれなかのものきれてまうとうたらそうこのものうまうえとれあうこのものをこ

廿

光
命

万亭應賀作 一陽齋豊國画

元大坂町代地角
上州屋重藏板

万亭應賀作 一陽齋豊國画

嘉永四年
辛亥春新刊